

大 博物館

NO. 33
2002.1

津山郷土博物館

だより



美作孝民記 文政3年 当館蔵

■『美作孝民記』は、10巻10冊からなり、文政3年（1820）に刊行された、実話に基づく孝子伝である。著者は甲田行喜。彼は、津山城下近隣で医業を営んでいたが、医業を通して貧しい農民の生活実態を知り、その中に見られる賞すべき親孝行の実例を収集編纂したのである。

『美作孝民記』に載せられた事例の中には、矢吹政則がまとめた「奨善録」と一致する事例が多く含まれている。ただ、内容は「奨善録」がより詳細であり、両者のいずれかが引き写したということではない。

津山藩の記録では、孝子に褒美を与えて賞した場合には、広く町在に知らせたことが見え、こうした情報は広範に行き渡っていたと思われる。

本書では、孝養の内容はかなり典型的であり、客観的な事例の列挙ではなく、啓蒙書としての脚色があると考えられるが、数多くの挿し絵が用いられており、近世美作の庶民生活をも伺い知ることのできる貴重な資料である。

はじめに

■『美作孝民記』は、10巻10冊からなり、文政3年に刊行された。著者は甲田行喜で、津山近隣で医業に関わっていた知識人である。彼は、医業を通じて農村における貧困と病気の実態を知った上で、親への儒教的な孝養のあり方を説くためにこの『美作孝民記』を著した。この本は、実話を基として貧しい庶民の孝を取り上げてあるので、当時一般的に考えられていた孝の思想を見るのみならず、親に孝養を尽くす姿を通して、美作の近世庶民生活を探る手がかりともなりうる。

本稿では、『美作孝民記』の事例を通して若干の考察を加え、近世における孝を考える端緒としたい。

孝行と貧困

■『美作孝民記』からひとつの事例を見てみよう。次に列挙したのは、長尾村の八右衛門の孝養の概要である。この事例の内容は特別なものではなく、他の事例にも共通する内容が多い。貝原益軒が『初学訓』巻二で述べている「養志と養体」の内容がそのままに実践されているかの如くである。

1. 至極貧しい農民
2. 性格は天性の孝順
3. 出掛ける前には詳しく行き先を告げる
4. 父には酒を絶やさない
5. 母には飴・砂糖菓子
6. 夏の夜には夫婦で団扇で扇ぎ続ける
7. 冬の夜には両親の布団を暖める
8. 一晚中両親のトイレのために起きている
9. 老人夫婦は家が貧しいことを知らない

『美作孝民記』に描かれる孝民は、みな貧しい生活を送っている。このことは、著者の意識においても明らかであり、貧困と孝には密接な関連がある。では、近世の孝民あるいは孝子が、必ず貧乏でなければならないのはなぜなのか。

それは、貧しさ故の自己犠牲が人々の心を打つか

らである。そして、近世における農民の困窮という現実も、このような思想を支える条件となっていた。『美作孝民記』に描かれる人々は、本当に真面目によく働き、年貢も期日を守って納めているにも関わらず、生活は少しもよくならないという現実の中で、道徳観や倫理観に疑問を持つことなく懸命に働き続ける。

働いても働いても生活がよくなれないという中で、自らを納得させる思想が必要だったとしたら、貧しい中で更に自己犠牲を美徳とする近世の孝思想こそはまさしく打ってつけのものであろう。自らの貧しさを他人の責任としないで、自らは貧困にあまみじて生きていき、親には過大な生活を保証する。しかし、そこには孝養を尽くしているという自負が残されるのである。

古代以来の孝子伝には多く貴族や有力者が登場する。しかし、近世の孝子はまずほとんどが貧しいのである。これは、孝の内容が変化したのみではなく、貧しさと自己犠牲という要素が加わることによって、近世独特の孝思想が形成されたのであろう。

裕福な生活の中で親に尽くしてみても、誰も孝子とは呼ばない。近世社会において孝子と呼ばれるためには、貧困と極端な自己犠牲の精神が必要なのである。

まさしく貧しいことが孝養を尽くすための前提条件であった。更に条件を調べるとすれば、親が病気であることであろう。困難が大きければ大きいほど、堪え忍ぶ自己犠牲が際だってくるのである。

これは、熊沢蕃山が、世の中に孝子の少ない理由としてあげている内容に適合している。蕃山は「歳寒くして松柏の凋におくることを知り侍りぬ」と例え、「大難にあひ大変に逢ひては、凡人と君子とのわかち大いにちがひあり」とする。まさしく平凡な、あるいは裕福な生活の中では孝子は生まれてこないのである。近世の庶民における大難とは困窮であり病気なのであった。

過分なものを親に提供することについて

■長尾村の八右衛門の親孝行の事例の中で、父親には酒、母親には飴や砂糖菓子を通常の食事以外に提

供しているが、それも、苦勞して用意していることを悟られてはならないとしている。他の事例と合わせて見ると、生活実態からかけ離れた食事や酒、菓子を提供されている。ここには、古来の『二十四孝』のような孝子伝の「孟宗の笋」や「王祥が孝感の鯉」(註)に見られるような奇跡は描かれていないが、孝養の中身としてはそれに近いものが求められている。

熊沢蕃山は、『二十四孝』的な極端な孝行を、現実的な論理によって否定している。『二十四孝或問』の孟宗の部分では、自然界の掟を道理として尊重する思想が前提としてあり、その道理に背くのは、欲望そのものも誤っているし、その欲望を満たそうとする行為も誤りであるとする。

ただ、だからといって『二十四孝』を否定することはなく、あくまでも孟宗は例外であるとして、「孟宗に在りては是非を論ずべからず」とする。自然の摂理をも否定する神の奇跡を期待することの不合理を唱えながら、そこに例外を認めざるを得ないのは、江戸時代の限界であろう。

しかし、『美作孝民記』との関連では、過分なものを親に提供することについては、近世社会において既に異論があったことは注目すべきで、伝説的な孝子伝による精神論的な孝行のあり方に対して、現実的な孝行のあり方が模索されていたことが分かる。

こうした考え方の一例として、井原西鶴の『本朝二十不孝』の序文が注目される。

「雪中の笋(たかんな)八百屋にあり鯉魚は魚屋の生船にあり世に天性の外祈らすともそれぞれの家業をなし禄を以て万物を調へ教を尽せる人常也此常の人稀にして悪人多し生としいける輩孝なる道をしらすんは天の咎を遁るへからず(以下略)」

この中で、雪の中の笋は孟宗、氷の上の鯉は王祥の話。いずれも『二十四孝』の中に登場する極端な親孝行の話である。

ここで西鶴は、必要なものは稼ぎによって購入すればよいとしており、奇跡的な神助に期待するのではなく、実生活の中での努力を奨励している。

こうした考え方が可能になったのは、近世社会における商品流通の発達により、いつでも金さえあれば欲しいものが手に入るという環境が整ってきたからである。まさしく蕃山の主張する如くに「時勢人情大いにかわれり」である。

しかし、『美作孝民記』の世界は、父母への孝行に「過分なるもの」を求めており、著者の孝行観には現実離

れた形式主義的な部分を感じられる。これは全体に見られる類型的な孝行の内容とも関連するであろうが、著者の編纂目的である啓蒙的教育的な配慮に沿った孝行話として仕上げられていることによる。

孝と封建社会

■『美作孝民記』に貫かれている、徹底した自己犠牲に美德を置く孝行観と、封建的な身分体制の維持を緊密に結びつけた思想が、中江藤樹の『翁問答』に見られる。そこに主張される「庶人の孝」では、封建制度の下での農民や町人のあるべき姿が述べられている。このことは正に「家」の存続こそが全てに優先する目標であることを示している。中江藤樹が「庶人の孝」で主張している孝行とは、家を存続して初めて父母に仕えることができるのであり、家なくして父母も孝行もあり得ないのである。

このように家の存続を第一としながら、あくまでも自己犠牲によって誰かに仕えることを美德とする思想は、他の「忠義」や「貞節」やあらゆる思想との融合が可能である。家が基本にある封建制度の下では、孝の思想の融通無碍な性格があらゆる思想と融合して封建支配を支えていたのである。

(註)

「孟宗の笋」… 孟宗の病気の母親が冬に笋を食べたいと言うので、孟宗は竹林に行くが、雪深い中で見つけられず、祈り嘆き悲しんでいると大地が割れて笋が生えてきたという。

「王祥が孝感の鯉」… 晋の王祥が継母の好む鯉を取るため、衣をぬいで氷の上に横たわり、氷を割ろうとした処、天がその孝心に感じ、氷が溶けて二疋の鯉が飛び出したという。

(尾島 治)

平成13年度企画展／美作の渡来文化

●平成14年3月16日(土)～4月21日(日)

■5・6世紀には、朝鮮半島から日本列島に多数の渡来人が移住してきました。彼らは文筆の能力や先進的な技術によって、古代国家の形成に大きな役割を果たしました。本展覧会では、美作地方の古墳時代遺跡にあらわれる渡来人の痕跡をさぐり、古代国家形成期における渡来人の意義を考えるものです。



主な展示資料

須恵器・土師器 津山市押入西1号墳出土
 鉄鐸・鉄鉗・鉄鎚 津山市西吉田北1号墳出土
 鉄鉗・鉄鎚・須恵器 津山市長畝山2号墳出土
 など



▲加茂岩倉遺跡見学風景

『第53回文化財めぐり』を実施しました

●平成13年11月11日(日)

島根県大原郡加茂町他
 参加者57人

■出雲といえば、大国主命の国譲りの神話で有名ですが、最近原始・古代史の常識を揺るがすような「大発見」が相次いでいます。今回はそれらを見学するバス旅行をおこないました。まず加茂岩倉遺跡では、弥生時代の銅鐸の出土状態が復元されていました。こんな山奥の急斜面に銅鐸39個が埋められていたとは?。つづいて荒神谷遺跡を訪ねました。ここは史跡公園として大きく整備され、弥生時代の景観はかなり改變されていますが、銅剣358本などが出土したことに首をひねるばかり。午後は出雲大社を訪ねました。すでに平安時代の巨大本殿の心柱は取り上げられていましたが、その模型や、高さ48mあったという、かつての本殿の模型にびっくり。バスの補助席まで満席の参加者一同、古代出雲のパワーに圧倒されどおしの日でした。

『津山松平藩町奉行日記十』の刊行準備すすむ

■今回翻刻するのは天明2年(1782)、同4年(1784)の記事です。このころはちょうど、江戸三大飢饉のひとつとして有名な「天明の飢饉」の時期にあたります。「天明の飢饉」は今回翻刻する天明2年から始まり、年を追うごとに飢饉はひどくなり、4年に至って落ち着きを見せはじめますが、その影響は後々までひびきました。この時期に津山藩町奉行後藤守助は、飢人救済のために色々な方策を取ったり、また飢饉の影響で増加した、城下に徘徊する人々の対処にも頭を悩ませました。また米相場が上がっていく様子が日記の中に記されており、米の高値に憂慮し、何とか対策を立てようとする人々の姿をうかがうことができます。

当館では、平成4年から津山松平藩町奉行日記の翻刻刊行を継続しています。町奉行日記は宝暦5年(1755)から慶応2年(1866)まで94冊が残されていますが、今回ようやく30年分・20冊を終えることとなります。残るは、年代にして81年分、冊数にして74冊、完結まであと20数年ほどかかる見込みです。

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：小・中学生 100円 (80円)
高校・大学生 150円 (120円)
一 般 210円 (160円)
※ () は30人以上の団体

大博物館だより No.33 平成14年1月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館
 〒708-0022 岡山県津山市山下92
 TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874
 E-mail：tsu-haku@tv.tn.ne.jp

印刷：(株)廣陽本社

大 は津山松平藩の捺印で剣大といい、現在津山市の市章となっている。